

始めるとき、どんなことでも力が要るんだ、動き出せば一人で用が足せる」と言っただけです。これですね。ゼロから一に踏み出すかどうか。逆に言えば苦しいければ苦しいほど、公の部分に時間と僅かな費用を割くことをお勧めします。

社会貢献の具体的な内容は

なんと言っても一番大きいのは、「掃除」の活動を世の中に広めたことですね。掃除をビジネスとしてやる人は世の中に多いですが、私たちの仲間のように、行く費用から宿泊の費用から会費まで払って、学校のトイレ掃除をして帰っていくんです。先日も鹿児島で行われた会に北海道から参加された方がおられました。わざわざ、大変な費用ですよね。毎月、新宿、渋谷の早朝街頭清掃をやっていますけども、そこに与論島から来た人もいましたね。与論島から鹿児島経由で来ようとしたら、往復の交通費だけで大変なものです。

人を引きつける掃除の魅力とは

これは、お釈迦様が掃除をすると五つの徳があると説かれています。一つは掃除をすると、自分の身も心もきれいになる「自心清浄」、二番目は「他心清浄」といって、掃除をしている人の姿を見ている人の身も心もきれいになる、三番目が「諸天歓喜する」といって、すべてのものが活き活きとして喜んでくる。四番目は「端正の業を植ゆ」といって、端正というのは「あの人は

端正な人だ」という端正ですね。すべてのものが整ってくるんです。五番目が、これは私はまだ分らないんですけど…、命、終の後、つまり死んでから、天上に生ずべけれど、もう一回生き返ると仰っているんです。これだけは私はまだやったことがないんです（笑）。四つまではその通りだと思います。

先日、広島に行って参りました。広島は私が呼びかけをして、県警本部が中心になって警察署が全部掃除をするようになったんですね。平成14年をピークにして、なんとも犯罪が52.3パーセント減ったんですね。半分以下になったんです。普通そんなことは無いですよ。警察の発表ですから、これは事実です。警察の署員がいろいろな掃除の会に出かけていって街をきれいにしたんです。日本を美しくする会が本元で、その下に地域の名前をかぶせた「掃除に学ぶ会」という会があるんですね。最初、「掃除を学ぶ会」と申し出たんですけども、私は「それはダメだ、これは掃除を勉強するんじゃない、掃除から学ぶ」ということから、「掃除に学ぶ」という名前にしております。今は日本全国、海外にも広まっています。台湾では環境大臣が、経済で世界一にするのではなく、道徳で世界一にしたい、そのためには、このトイレ掃除が一番有効だといって、よく参加されています。

便教会新聞

第 143 号

平成31年3月故・森 信三先生が、「実践しなくても判る程度の道理は、大したものではありません。自ら苦労してやってみない限り、真理の門は開かれるものではありません。」と説かれま

便教会新聞発行責任者 高野修滋
〒四四五〇八〇二
愛知県西尾市米津町天竺桂二七
T/F〇五六三ー五六ー四三二七
携帯 090 - 4215 - 1727

『便教会に参加してからの自分』

東海学園大学 養護教諭専攻四年

小川 七彩

初めて便教会に参加したのは、大学三年生、一昨年の夏でした。当時のことは今も鮮明に覚えています。

幼いころから神経質なところがあり、「不潔」ということに対してとても敏感でした。心のどこかで「養護教諭になる前に少しでも克服したい」という気持ちはありましたが、なかなか行動に移すことができませんでした。そんな時、ゼミ担任である梶岡先生から、「教員は普段、教壇の上から児童・生徒を見ていることが多い、だからこそ、教員が腰を落とし、目線を低くしてトイレ掃除をする。そこから学べるのが沢山あるはずだから、ゼミで参加しましょう!」と言って頂き、参加することを決めました。

しかし、実際に素手でトイレ掃除を始めた途端、吐き気と涙が止まりませんでした。そんなとき、同じグループであった眞鍋さんや白鳥さんに「綺麗になってるよ!頑張ってるね!」と声をかけて頂き、もっとトイレを綺麗にしたいと気持ちが湧いてきました。それ

と同時に、「これは、自分を変えるチャンスかもしれない」と思い、頑張って掃除を続けていたところ、気づけば電車のつり革さえも触れなかった自分が、便器に顔を近づけながら必死になってトイレを掃除している姿がありました。掃除を終えたトイレは本当にピカピカで今まで感じたことがない感動がこみ上げてきました。掃除前は薄暗かったトイレも明るくなり、トイレ独特の嫌な臭いもありませんでした。そして、この便教会のおかげで『嫌だから、苦手だからと逃げるのではなく、自分の苦手なこともしっかり向き合い、挑戦することでは人は変わる』ということを私は身をもって知ることができました。

この便教会の参加以来、生活が少しずつ変わりました。

私は幼い頃から家庭環境に恵まれませんでしたが、そんな私を救ってくださった恩師の影響で、中学生の頃から「教師」という夢を叶えるために必死に生きてきましたが、大学に入学したものの、養護教諭をめざす仲間と自分を比べ劣等感に駆られることや、自分には夢を叶えることはできないのだと悲観的に考える時期もありました。しかし、便教会で長年逃げてきた神経質な自分が、周りの支えの

おかげで一つの壁を超えることができたのだから、自分で自分の限界を決めてしまうのはまだ早い!と強く思うようになりました。それから、今まで以上に教員採用試験の勉強に必死で取り組みました。今では胸を張って、「養護教諭になるために、誰よりも努力できた」と言うことができます。

そして、昨年8月に一次試験の合格通知が届きましたが、一緒に夢に向かって努力してきた親友は残念な結果に終わってしまいました。しかし、それから二次試験を迎えるまでの約2週間、その親友は毎日、採用試験の実技対策につきあってくれ、そして私は10月に無事、二次試験の合格通知を頂くことができました。

今回、教員採用試験を突破できたのは、試験勉強に真剣に向き合い、最後まであきらめなかったこと、そして友人や家族、先生方のサポートがあったからだと思います。四月から養護教諭として現場に出ることができました。しかし、これはゴールではなく、スタートであると考えています。また養護教諭として現場に出た際には、様々な困難や壁と衝突することもあると思います。そんな時は、便教会で回りに支えられながらも自分の苦手として

【編集後記】先日、防災会議で「ある村は直下型の地震でほとんどの家屋が全壊、半壊をしたけど死者はゼロでした。その村がお互いの状況をよく知っていて、コミュニティとして機能していたんです。」と話され、繋がりが希薄化してる地域社会の現状を問題提起されました。Communityの語源を調べると、ラテン語で「共有」を意味する Communis から来ているようで、Communicate という動詞も派生しています。Community とは、コミュニケーションが頻繁にあって初めて成立する共同体なのです。その会議に参加した人からは「掲示板をポスティングしないで、一言掛けて手渡しする」とか「ゴミ出しの際にあいさつをする」とかという声がけ、コミュニケーションを積極的に取ることが繋がり、絆を強くするのではないかと提案されました。私は月に2回程度、住んでいる地域の小さなゴミ拾い、小さな草取り、小さな側溝掃除などの清掃美化活動をすれば、他者をいたわる気持ちが生まれます、と提案しました。掃除は老若男女だれでもがすることができ、ポイントは小さく続け、きれいになることでみんなの気持ちが穏やかになり、きれいを維持しようと連帯感を持てるようになるからです。荒れた学校が、倒産しかけた会社が掃除で立ち直った事例が多数あります。掃除は嘘をつきません。掃除には不思議な力があります。高野修滋 拝

きたことにしっかりと向き合ったこと、その経験と学びを自分の生活の中でも活かし、夢の実現のために努力できたことを糧とし、子供の心身の健康を守ることのできる養護教諭として尽力していきます。また、私生活では多くの人に支えられてきたように、次は自分が支える側となり周りを支えていきます。ありがとうございました。

『大切にしたいこと』

東海学園大学 養護教諭専攻四年

木下 詩月

私は高校卒業後、地元を離れて養護教諭をめざすために愛知県に来ました。慣れない土地で初めてのことばかりで、挫折そうになることも多かったですが、四年間非常に濃い体験をさせて頂き、多くの学びを得て成長できたと感じています。その濃い体験の一つに、三年生の夏に出会った便教会があります。

便教会は、大学の先生に教えて頂き参加しました。最初は「素手でトイレを掃除する」ということに疑問を感じていました。「楽しいのかな?」「素手でお掃除をすることに、何の意味があるのかな?」といったように、どちらかというところの否定的な考えを持っていたように記憶しています。しかし、実際にお掃除をやってみると、終了する頃には達成感に満ち溢れ、参加できて本当に良かったという前向きな気持ちになっていた自分が居ました。

掃除から意識して取り組みました。みんなが見逃してしまうようなところや、躊躇してしまうところに積極的に手を伸ばし、きれいにしていきました。

そんな掃除を続けていると、私生活にも変化が現れました。いつもなら見もししていなかった人の行動に意識が向くようになり、少しずつではありますが、気の利いた行動ができるようになっていきました。それだけではなく、人の気持ちを察したり、自分本位に考える回数が減ったりと、徐々に自分が成長していくのをひしひしと感じることが出来ました。

中学校を卒業した後、その中学校で便教会があると聞き、迷わず参加しました。この便教会が僕にとって初めての本格的なトイレ掃除でしたが、先生方の厚いご指導のおかげで満足のいく活動となりました。

この掃除に対する姿勢は高校に入ってもなくなることはありませんでした。一年生の頃は、自分で掃除道具を買って、自分なりに方法でトイレ掃除を行いました。掃除が終わった後、トイレが見違えるような輝きを放っていた時の高揚感はいまだに覚えています。

高校二年生になり、大きな転機がありました。この年に新しく赴任してきた先生の中にかつて中学校で便教会と一緒に取り組んだ先生（安井佑騎先生）がいました。その先生は常日頃から掃除を行っていて、僕

私はトイレに限らず部屋なども、自分の心を映していると思っています。実際に何か悩みや不安があるときは大自身の周りもゴチャゴチャとしていて、その悩みや不安を乗り越えるためには、まず身辺を綺麗にすることが必要です。これは便教会に参加したからこそわかったことです。便教会での経験から掃除に没頭することで、行き詰まった考えなどを切り替える機会になると感じられたからです。実際にお掃除をしている間、私は自分が歩んできた道を振り返っていました。そして、忘れていた沢山の大切なことを想い出すことができました。お掃除を通して一度原点に戻ることができた経験は、本当に貴重なものだと言えます。

私は春から養護教諭としての一步を踏み出します。学校現場ではトイレの汚れから見えることや教室の汚れから見えること、わかることがあるのではないかと思います。また、子ども言葉からも全てがわかる訳ではありません。伝えたいけれど伝えられないこともあると思います。その時に、その子どもの身辺を見ることが、子どもとともに掃除をすることで分かることもあるのではないかと考えています。

学校において保健室は、子どもにとって心の拠り所になる場所です。養護教諭として子どもが過ごす環境に配慮することや、子どもと共に掃除を行い、普段では見られない一面に気づくことを大切にしていき、心身ともに

も負けじと掃除に取り組みました。一、二か月ほどの短い期間ではありましたが、毎朝三十分、校舎の廊下や壁を掃除しました。一度だけ、二人だけでトイレ掃除もしました。

その先生のつながりもあり、その後は様々な奉仕活動に参加しました。犬山の城下町の清掃や、小学校の便教会など、自分の時間の許す限り、奉仕活動に費やしました。今年に入り、扶桑東小学校の便教会で、小学校の時の担任の先生（木原勝利先生）と再会しました。

先生はその小学校で便教会を積極的に行っており、実に五年ぶりの再会でした。しっかりと話し合う時間はありませんでしたが、掃除を通して楽しい時間を過ごせたと思います。

僕は掃除に出逢って、まだ三年しか経っていません。とても短い期間ではありますが、その中身はとても濃いものでした。

この三年間で一番実感したのは、掃除を通してつながる縁です。

掃除を通して、小学校の頃の担任の先生や、中学校で便教会を共に取り組んだ先生との再会は僕にとって大きな転機となりました。他にも様々な方々と出会い、様々な話を聞かせていただきました。数多くの価値観やその人の人情に触れて、成長してきました。

今では、「大人に見える」や「落ち着い

健康に育つよう見守り、寄り添っていきたいと考えています。まだまだスタート地点に立ただけで不安なことばかりですが、こまで支えてくださった多くの方々、多くの経験、そして便教会で学んだことを忘れずに子どもと向き合っていこうと思います。ありがとうございました。

『縁』

よすが

愛知県立犬山高校
二年 玉谷 駿弥

僕が掃除の必要性・本質を見つけたのは、中学校三年の頃でした。

当時、僕は掃除を全くやらず、先生に言われて嫌々やるような人間でした。

そんなある日、部活動の顧問の先生が持っていた鍵山秀三郎著の「掃除道」を読みました。その本には、掃除のことについて様々なことが書かれていました。鍵山さんの並々ならぬ掃除への熱意、その熱意に動かされた人たちの「人のための」奉仕活動。その一つひとつが僕にとって驚きでした。普段から、公園などでごみ拾いをしている方々を目にしましたが、気に留めたことはありませんでした。そのような方々が、どんな気持ちでやっているのかなど考えたこともなかったからです。

この本を読んだ後、少しずつ僕の掃除に対する姿勢は変わっていきました。普段の

で見える」などの言葉は自分が着実に成長していると実感できるので、とてもうれし

いです。この経験を通して、学生である自分が主体的に奉仕活動を行っていき、より多くの人に掃除のよさ、大切さを伝えていこうと思いました。

『私の人生 その十一』

日本を美しくする会
相談役 鍵山秀三郎

ゼロから一

まちがいなく、「余裕」というものは自然にできるものではないんです。忙しい中にあっても、僅かな時間でも割く、僅かな費用でも割くというところから始めると、やがてそれがだんだん余裕という部分になってくるわけですけど、それを「そんな暇はない」とか「そんな余裕はないから」と言って、いつまでも「私」部分だけをやっていたら、ずーっと「私」部分で終わってしまふんです。そう思ったときに一步を踏み出すんです。それがゼロから一なんです。昔、市川團十郎が弟子を連れて旅をしてたとき、ある駅でもの凄くたくさん荷物を積んだ貨車が止まっていて、大勢で寄ってたかってそれを押したんですね。その貨物車が動き始めたら、後はひとりの人だけで押していったんです。団十郎が「最初、